

国際社会学部

篠原 琢

Taku SHINOHARA

地域社会研究コース／中央ヨーロッパ地域
歴史学



中央ヨーロッパという世界

私の専門は中央ヨーロッパの歴史、かつてのハプスブルク君主国の領域の19世紀、20世紀史です。中央ヨーロッパの近現代史は、断絶と強固な連続性によって特徴づけられます。現在、私たちが知るこの地域の国家秩序は、19世紀後半になっておぼろげな姿を現し、第一次世界大戦で長い歴史を持つ諸帝国が解体した後、ようやく明確な形を取りました。さらに、第二次世界大戦による破壊、ナチ・ドイツによる絶滅戦争、人種政策や、スターリンの社会改造、そして戦争末期から戦後の住民追放によって、中央ヨーロッパの住民構成は断絶ともいってよい変化を被りました。

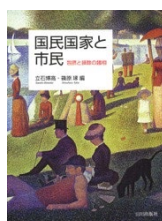
このような変化によってもなお、「中央ヨーロッパ的」な文化、景観、歴史に対する意識・態度、といったものを語ることができます。「中央ヨーロッパ的」とは定義できるものであるより、それぞれの研究の結果、見えてくる文化的風景です。そして、そこに到達する過程で、みなさんは、「中央ヨーロッパ的」な問題関心、ある種の「感覚」は、広く深くみなさんの生きている場、現代の諸状況に活かせることを知るでしょう。

研究紹介

研究対象はハプスブルク帝国の領域のうちでも、ボヘミア諸邦（現在のチェコ共和国）、オーストリア、そしてガリツィア（ポーランド南東部からウクライナ南西部、クラクフとリヴィウという2つの中心とする楕円地域）です。19世紀のハプスブルク帝国ではネイションの文化（「チェコ人」「ドイツ人」「ポーランド人」「ユダヤ人」etc.）が競合して発展し、政治・社会・文化の編成が変わりました。一般に「民族問題」といわれる現象を「ネイションがどのように創られるのか」という観点から考え直しています。「帝国とは何だったのか」考え直すことも重要です。右にあげた論文二本はそのような研究の途中経過を示したものです。都市景観の変化や文化遺産の保護政策についてもネイションの文化の創造、帝国統治論といった視点から研究しています。

右上の絵は「楡の木のある僧院」（1810）と題されています。廃墟になった教会に修道士たちが棺を運び込んでいるのは中央ヨーロッパの歴史の原風景のようです。上に述べたように20世紀の中央ヨーロッパは歴史の断絶を経験しました。それでもゆたかな文化の伝統はみごとによみがえりましたが、廃墟によって失われたものを記憶し思い出すことは中央ヨーロッパの歴史を考えるうえでたいせつなことだと思っています。そこからもう一つのテーマ、ホロコーストの記憶や住民追放の研究に取り組んできました。

社会主義期の「異論派」といわれる人たちの思考をたどることも私にとって重要なテーマです。異論派は中央ヨーロッパの破局に真剣に向き合いながら社会主義社会を考えました。歴史論は現代社会における政治的・倫理的責任と深く結びついていたのです。こうした議論は中央ヨーロッパを研究するばかりでなく、私たちの現在にも深い示唆を与えてくれます



担当授業

- 中央ヨーロッパ地域基礎
- ハプスブルク帝国史
- 歴史社会研究入門
- ホロコーストの記憶
- 中央ヨーロッパの歴史と文化（演習）
- ナショナリズム論・帝国論

関連する分野

- 都市史
- 文化史
- 文化遺産研究

出版物、論文など

- 「中央ヨーロッパが経験した二つの世界戦争」（『岩波講座世界歴史21巻』）
- 「『名前のないくに』-『小さな帝国』チエコスロヴァキアの辺境支配」（『民族自決という幻影 ハプスブルク帝国の崩壊と新生諸国家の成立』、昭和堂）
- 『ハプスブルク帝国政治文化史』
- 『国民国家と市民』
- 『ドナウ・ヨーロッパ史』
- オウシェドニーグ『エウロペアナ』（翻訳）

国際社会学部

「中央ヨーロッパの歴史と文化」ゼミ

どのようなゼミか

このゼミでは中央ヨーロッパの近現代史、現代社会における歴史問題を対象にしています。時代としては18世紀末から今日まで、地域的にはドイツからロシアまでを含み、バルカン研究を行う人もいます。各自が卒業論文のテーマを見つけ深めることが重要ですが、そのために歴史学の方法や関心、中央ヨーロッパ史の焦点となる問題を考えて訓練を積まなければなりません。そのため毎年、テーマを定めて研究文献を読み議論しています。最近のテーマは「現代史の記憶」「パブリックヒストリー」「20世紀史論」「帝国論」などでした。

演習では、ナショナリズム、社会主義、歴史の表象（文学や映像、景観などに表現される歴史）、集合的記憶などの問題を広く扱います。課題によっては、中央ヨーロッパ以外の地域を学びたい人にも演習は開かれております。

演習は、文献の講読を通じて、ヨーロッパ近現代史にアプローチする方法を学び、同時に参加者各自が卒業論文・制作に向けたテーマを発見することを目指します。アクティヴ・ラーニングでは、日本国内の近現代史にかかわる遺産を訪ね、みなさんのテーマとのかかわりを考えます。昨年は、近現代史に関わる都内の博物館・資料館を2度に分けて訪ねました（東京大空襲、江戸・東京博物館、東京都慰霊堂、靖国神社遊就館、昭和館、平和祈念展示資料館）。

大学院では中央ヨーロッパ大学（ウィーン）とのあいだで修士課程のダブルディグリープログラム「公共圏における歴史」History in the Public Sphereを運営しています。このプログラムは英語で運営され、社会のなかで歴史がどのように表現され、人々を結びつけ、逆に人々を分断するのかを国や地域を越えて比較しながら学ぶものです。学部のゼミでもこのプログラムへの接続を意識した授業を行っています。



パウル・クレー「新しい天使Angelus Novus」
「天使は過去に顔を向けている。私たちなら次々とできごとが起こるのを見るだろうが、天使が見るのは瓦礫を積み上げる破局ばかりだ。天使は羽を休め、死者を呼び起こそうとする。しかし天国から嵐が吹いてくる。暴風で天使は羽を閉じることもできない。嵐が吹いて、うしろ向きになりながら天使はどうしようもなく未来に向けて吹き飛ばされていく。瓦礫は目の前で積み上がっていくばかりだ。この嵐を私たちは進歩と呼ぶ。」（ワルター・ベンヤミン）

卒論

- ソヴィエト占領地域／ドイツ民主共和国における「移住者」政策
- チェコとドイツの言語境界地域におけるこどもの国民化
- 第二次世界大戦後のドイツにおける国土計画:爆撃による破壊と都市の再生
- ポーランドにおけるミュージアムと歴史認識
- チェコ国民最盛期におけるチェコ料理の誕生

おススメの本

- E・ホフマン『シュテットル』
- イヴァン・ジャブロンカ『私にはいなかった祖父母の歴史』
- カール・ショースキー『世紀末ウィーン 政治と文化』
- オウシェドニーク『エウロペアナ 20世紀史概説』
- クロウトヴォル『中欧の詩学』